小山工業高等専門学校研究紀要
第 35 号　(2003)，　1 — 10

意味の不確定性と確定要因

On Disambiguation in Lexis and Syntax

井　上　次　夫

Tsugio　INOUE

1．はじめに

言語形式の意味は，大きく２つの単位レベルにおいて典型的な不確定性を有すると考えられる。１つは，語のレベルに代表される「多義性」と関与する不確定性であり，いま１つは文・発話のレベルに代表される「解釈」と関与する不確定性である。換言すれば，前者は主に意味論が扱う統語環境と関わる同音異義語，多義語といった語彙・文法的意味の問題であり，後者は主に語用論が扱う話し手の意図・文脈的意味といったコンテクストの問題である。

本稿では，それら意味の不確定性の実相について語レベルから文・発話レベルまでを概観し，その確定要因について若干の考察を行う。

2．語レベルにおける意味の不確定性

2．1　単純語(1音節語)

意味を担う最小の言語単位としては形態素(morpheme)を認めることができるけれども，ここではまず実際に発音可能な最小の言語単位である音節１つから成り立つ語，すなわち単純語のうち１音節語に限ってその意味を具体的に観察してみる。

たとえば，突然「き」という文字を見せられて，この意味は何かと問われた場合を考えよう。

（1）　き

「木」「樹」などがまず思い浮かぶかもしれないが，「気」「黄」あるいは「過去の助動詞」であるかもしれない。事実，これらは国語辞典類を引けば見出し語として掲載されている。すると，それら見出し語すべてが「き」の意味であることになり，この点で「き」の意味を一義的に確定することは困難であると言わなければならない。ところが，聞き手が「き」は実際，それらのうちのどの意味かと重ねてたずねてきたとき，仮に「き」の意味候補である国語辞典類の見出し語のいずれか１つをもって答えたならば，それはあくまで可能性のある答えのうちの１つであるにすぎない。これがクイズなどでは予め用意されている答えと偶然に一致することはあるかもしれないが，一般的な場合において，結局，「き」の意味を幾つかある候補の中のいずれか１つに限定して答えることは不適切であるということになる。ここに，改めて「き」という文字言語の意味の不確定性が指摘されるだろう。「き」の意味の候補として実際，幾つかを挙げることができたとしても，その中のいずれか１つに限定し，確定することはできない[注1)]。それというのも，これが何の前触れもなく突如，「き」が単独の「き」としてさし出された場合だからである。しかし，もし，これが次の(2)ような形でさし出された場合であるならば，下線部「き」の意味はおそらくそれぞれ一義的に確定することだろう。

（2）　「一本のき」「きがつく」「赤・青・き」「きを衒った趣向」「昔，男ありき。」の「き」

このことから，「き」という語が使用されている個別的・具体的な統語環境(syntactic enviroment)の与え

られることが問題の語の意味確定に貢献すると言える。つまり，語の意味は統合的関係(syntagmatic relation)の中で確定する。なお，その場合でも，「一本のき」の「き」は「木」か「樹」か，などといった類義語の問題は残る。また，すべての1音節語がこのような不確定性を有するのではなく，たとえば名詞の「て」と限った場合には「手」のように一義的関係で結びつく例も幾つか存在する。

次に，同じ1音節語「ひ」の場合を考えてみよう。

（3） ひ

やはり「日，火，灯，碑，比」などが「ひ」の意味候補として存在するが，「ひ」の意味として無条件下にそのうちのいずれか1つに限定し，確定することは不可能であり，また不適切でもある。ところが，これを音声言語としてみるとどうだろう(以後，音声言語の場合，カタカナで「ヒ」「ハ」などと示す)。すると，「ヒ」はアクセントの型の違いにより，次の2種に分類される[注2)]。

（4） ヒ⓪(○▶) ……日，碑　　平板型アクセント
　　ヒ①(●▷) ……火，灯，比　　頭高型アクセント

したがって，文字言語「ひ」に比べて音声言語「ヒ」の場合，アクセントを手がかりとしてその意味候補をいくぶんか絞り込むことができるけれども，なお，いずれの「ヒ」であるかはそれが使用される個別的・具体的な統語環境(統合的関係)が与えられなければ1つに限定し，確定することはできない。

では，その統語環境が与えられた，次の音声言語「ハ」の場合，その意味は確定できるであろうか。

（5） ハガ　イタム。

まずはアクセントの型の違いにより，「ハ⓪(葉)」と「ハ①(歯・刃)」の弁別が行われ，前者「ハ⓪(葉)」の場合にはその意味が一義的に確定される。ところが，後者「ハ①(歯・刃)」の場合については，たとえば「ハガイタムノデ，医者ニ行ッタ。」のような更なる統語環境が与えられなければ依然としてその意味はいずれか1つには確定され得ない。このように，音声言語の場合，アクセントは語の識別に貢献する場合もあるが，必ずしも語の意味を絶対的に指定し一義化するものではない。つまり，アクセントは語が有する意味の不確定性を完全に払拭するものではない。なお，音声言語の場合においても，文字言語の場合と同様，個別的・具体的な統語環境に意味確定の要因が求められることには変わりがない。

以上の考察から，次のようなことが言える。一般に，語には形式と意味とが一義的に確定され得るものとそうでないものとが存在する。しかし，語の意味がその形式と一義的に確定され得ない場合であっても，通常の語の使用，言語コミュニケーションにさしたる支障のないのも経験的事実である[注3)]。支障をきたすのは，たとえば上述の文字言語「き」では「木」と「樹」のような類義語の場合であり，音声言語「ハ」ではアクセントにより大きくは意味が区別される「ハガ　イタム。」であっても，それ以上の統語環境が与えられなければ意味が確定できないにも関わらずそれが与えられていない場合，また同じ音声言語であっても「メガ　イタム。」の「メ」ように「目」「眼」「芽」がいずれも同じアクセントの型であるといった同音異義語の場合や多義語の場合などである。

2．2　単純語(2音節語)

ここでは前節と同様の観察及び検討を主に2音節語において行う。

いきなり「ヒョウって何？」とたずねられたら何と答えるだろうか。たずねられた側は，それが「ヒョウ①」という頭高型アクセントであることから，平板型アクセントの「表」でも「票」でも「評」でもないことを理解する。では，「豹①」だろうか。たずねた相手が本を読んでいた小学生でもあってみれ

ば，動物の「豹」は既知の語であると推測し判断した上で，「そのヒョウ①は，たぶん，雪みたいに空から落ちてくる大きな氷の粒のこと。そこには『ヒョウ①が降ってきた』とか書いていないか。」のごとく返答するかもしれない。そして，実際，小学生が読んでいた本に次の(6)のように書かれてあれば(下線は論者，以後同じ)，その小学生は「雹」の意味を了解し納得することになるだろう。

(6) かみなりが ゴロゴロなって いなづま(ママ)が ピカピカひかります。とうとう ひょうまで ふってきました。(アニタ・ジェラーム，常陸宮妃華子訳『せかいでいちばんおりこうないぬ』)

この例から言えることは，ある語を統語環境から切り離して単独で取り出すと，語の意味を一義的に確定できない場合があるということである。もちろん，「アリ」「ユビ」などのように言語形式が「蟻」「指」という意味と一義的関係で結びつくものもある。しかし，上の「ヒョウ」の例では，ひとまずアクセントがその型の違いにより語の識別に貢献する。しかし，アクセントによって識別された語において，なお同音異義語(豹，雹)が存在するのであり，語のレベルにおいて意味の曖昧さ(ambiguity)を完全に除去できるとは限らないのであった。このことを本稿では「意味の不確定性」と呼んでいる。

ところで，実際の日常会話では先行発話がなく，単独で発せられた発話の場合，すなわち統語環境が与えられない場合でも，たとえばそれがある事物・現象・事態などを目前にして「ヒョウ！」(頭高型アクセント)と発せられたのであれば，その「ヒョウ」は「豹」か「雹」のどちらか1つに絞られ，即座にその意味が確定することであろう。これは，そこに非言語的コンテクスト(nonverbal context)が存在するからである。いっぽう，「ヒョウの赤ちゃん」という連語や「ヒョウが降ってきた。」という文・発話での使用においてもそれぞれの意味を一義的に確定することができる。つまり，語の意味は，通常，実際の言語使用の場において一義的に確定されている。一義的に確定され得ないものとして注意すべきは同音異義語，多義語などの場合である。

たとえば，頭高型アクセントの3音節語「キカイ」の例を考えよう。

(7) 残念ながら，まったくキカイがないのです。

この「キカイ」が「機会」「機械」「器械」のいずれであるかは，話し手の意図に反して，必ずしも聞き手に一義的に確定されるとは限らない。その確定にはたとえば「絶好のキカイ」「キカイの購入」などの統語環境が示されていたり，さらに話題が留学であるとか，発話者が工場主であるとか，場所が体操教室であるとかの非言語的コンテクストが明らかであったりすることが求められる。

以上を語レベルにおいてまとめると，語には統語環境が与えられずに単独でさし出されただけでその意味が一義的に確定され得るものと一義的には確定され得ないものとがある。一義的に確定され得ない語であっても，実際の言語使用という場においては統語環境が与えられて一義的に意味が確定されることが多い。前者のタイプを「統語環境独立型」，後者のタイプを「統語環境依存型」と仮称する。

(8) 語の意味確定タイプ

a．統語環境独立型—統語環境から離れて単独でも一義的に意味が確定するタイプ
例 お，て，あり，ゆび，つくえ……(名詞)

b．統語環境依存型—統語環境があって初めて一義的に意味が確定するタイプ
例 き，は，ひょう，きかい……(名詞)

なお，統語環境依存型だからと言って，その語の意味がまったく無限定的でとりとめがないわけではなく，通常，1つ以上の可能性ある意味候補が存在する。この点で，意味の「用法説」[注4)]とは異なる。哲学者のウィトゲンシュタイン(Wittgenstein)は「語の意味とはその語のその言語における用法である」

と言っているが[注5)]，「意味」の存在を認めず「用法」のみが存在するという主張は，Wという語は存在してもその意味は存在しないという主張になり，意味のいわば空集合という無限定性に通ずる。したがって，実際のWという語の用例または用法のみに意味が立ち現れてくるという考え方は，意味が確定する際における統語環境やコンテクストの果たす役割を過度に重視していると言える。ここに「意味づけ論」[注6)]の登場する背景もあるが，これについて今は触れる余裕がない。

最後に，線条的に並んだ言語音連鎖を１つの統語環境とする考え方は，連語，連文，隣接する発話などの考察を行う際に，それらがコンテクストを成立させる要因であると考えることと平行的であると言える。そして，統語環境もコンテクストも，語なり，文なり，発話なりの意味の確定に参画し貢献する。以上，述べてきたことは一見，言語の恣意的であることの例証にすぎないかのような印象を与えるかもしれないが，しかし，語と語，文と文，発話と発話との関係から意味の確定要因を考察する上で，統語環境及びコンテクストの果たす役割として確かめておかなければならないことであった。

２．３　複合語

ここでは，単純語と複合語の連続性における意味の不確定性について考える。そこでまず，１音節語「き」と「も」の言語音連鎖について具体的に観察してみよう。

まず，「キ」が発せられた段階で認められる幾つかの意味候補である「木」「樹」「気」「黄」などは，続いて「モ」が発せられた瞬間，その資格を喪失するであろう。否，言語音連鎖の中途における「キモ」の段階ではいまだ語の成立とは言えない。なぜなら，「木も」「気も」などの可能性が存在するからである。ところが，いったん「キモ」という言語音連鎖が断止・終了し，語としての「キモ」が確定した段階においてみると，語としての可能性を有していた「キ」は単に語「キモ」の構成要素としての音節に成り下がるのである。すなわち，これは語「キモ」の意味が語である「キ」の意味と「モ」の意味との合成的意味として一定の計算により求められる性質のものではないことを示している。つまり，「キモ」の意味は「木」や「藻」などとは何ら意味的関係を持たない「肝」として確定するのである。

さらに，理論的には「キモ」の段階で断止・終了せず，引き続いて「ノ」が発せられる場合，「肝の」という意味の可能性が残されていると言える。しかし，そこで言語音連鎖が断止・終了し，語としての「キモノ」が確定した段階では，その意味は「肝の」ではなく「着物」として一義的に確定する。なお，実際の発話では「肝の」と「着物」ではアクセントの型が異なるのであるし，文字言語であっても「きもの」の次には「きものほうが好きだ」「きものが好きだ」のように異なる品詞が接続するし，それぞれの漢字が使用されもするため，上で述べたような逐次的解釈が行われているわけではない。

ところが，このような考察を経てみると，言語の意味理解は言語の線条性において一定の段階ごとに仮の意味確定が行われ，それが順次修正されては確定されていく過程を内包していると言わざるを得ない。時間の流れとともに刻々と変化する統語環境の中で，同時に言語音連鎖の意味の理解も刻々と変化していくのである。換言すれば，言語活動はそれが営まれている限りにおいて，聞き手にとっては意味の不確定性の確定化の試行を孕んでいることになる。もちろん，「決して」のような副詞や「うだつがあがらない」のような慣用句表現には，言語の線条性を考慮してみると，当初から意味の不確定性はいくぶんかは除去されているのであり，言語の形式からある程度その意味が予測できる場合の例であることは否定できない。

さて，以上のことから，次のような理解が成り立つであろう。

（９）　意味の確定化過程

発話は，その発話が行われている限りにおいて，その発話の意味の不確定性の提示と意味の仮確定，そうして仮確定された意味が新たな不確定性にさらされながら新しく提示され直し仮確定されていく過程を内包している。そして，発話というコンテクストの中で意味は生成と修正を繰り返しながらその確定をめざす[注7)]。

こうして発話が断止・終了した時点でその発話の意味が最終的に確定する。これは，統語環境及びコンテクストもまた発話の断止・終了とともに確定することによると考えられる。このときに確定する意味とは，いわゆる命題的意味(論理的意味・知的意味)と言われるものであると考えられる。ところが，発話の意味がそれに尽きるものでないことは以下に述べる。

2．4　アイロニー

語には命題的意味とは別に暗示的意味を慣習的に持つものがある。その典型が〈皮肉 irony〉であり，いま，〈皮肉〉を含意する表現を「アイロニー表現」と呼ぶ[注8)]。すると，アイロニー表現は文字通りの意味と話し手の意図的意味とが一致せず，食い違う表現であると言える。換言すれば，アイロニー表現は言語形式の命題的意味と話し手の暗示的意味という２つの意味を持つ(cf.慣用表現「油を売る」))。言語形式は，コンテクストに依存しないのであれば文字通りの意味として理解されるのが通常であるが，時にコンテクストから文意とは異なる〈皮肉〉の意図が解釈されることがある。しかしまた，次に挙げるようなコンテクストから離れて(コンテクストが与えられなくて)もアイロニー表現として確定しやすいものがある。

(10)　おめでたい男，要領がいい，口が達者だ，いい格好，いい子になる，調子がいい，
　　調子に乗る，しっかり者……

この中でも，〈皮肉〉の意味が慣習的・確定的な「おめでたい男」から，必ずしもそうとは限らない「しっかり者」まで程度の差があるが，そこに共通しているのは文字通りの意味に正の評価性が認められることである。特に，形容詞「いい」についてみると，次の(11)に示すような正と負の評価性において連続性を持つと言えよう。ア～ウでは〈皮肉〉の意味が慣習化しておらず，エ～クでは〈皮肉〉を言語形式が慣習的に担い，エ付近がその境界部分(中間部分)にあたると思われる。

(11)　「いい」の評価性

ア　いい書物
イ　いい性格
ウ　いい関係
エ　いい加減
オ　いい気
カ　いい気味
キ　いい面の皮
ク　いい迷惑

〈皮肉〉のような心的態度である発話態度が言語形式と結びついてアイロニー表現として慣習化していない場合(ア～ウ)に，臨時的に〈皮肉〉を担っているか否かの手がかりはコンテクストに求めることになる。コンテクストには，文脈のほか，話し手・聞き手，発話の仕方(速度，強弱)などが広く考えられる。この点からも，語レベルにおける意味の確定化に際してのコンテクストへの依存が指摘されるのである。

3．文・発話レベルにおける意味の不確定性

3．1　一語文

文は，語及び語の連鎖に「発話・伝達のモダリティ」[注9)]が加わって初めて成立する。一語文は文の中にあっては特異な位置を占めるものであるが，文であることに異論はない。

たとえば，「犬」という語と「犬！」という文とでは大きな次元の違いがある。語である「犬」がイヌという動物一般を指示しているのに対し，文である「犬！」はそのイヌ及びイヌに関わる事態に対する話し手の認識・判断・態度などを表明している。語と文の違いを山田孝雄(1936：899)は次のように述べている。

(12)　「犬」の突然とあらはれたるを見て急に人に告げむとしては，委細を述ぶる遑なくしてたゞ，
犬犬
といふ如く叫ぶこともあり。この時の「犬犬」といへるものは思想よりいへば，「犬見ゆ」「恐しき犬よ」「犬汝に逼れり」「注意せよ」などの意をあらはすものなれば，ある思想をあらはすに用ゐたるなり。かくの如くある思想をあらはすに用ゐたるものはこれ既に単語にあらずして，文と認むべきなり。

すなわち，一語文「犬！」の意味は語としての「犬」の語彙的意味(語義)を超えている。つまり，そこには話し手による，犬の発見の告知，犬に関する注意喚起といった意図が託されている。そして，この例に明らかなように，話し手の意図は一語文においてさまざまに解釈される可能性が広がっていることから一義的に確定することは難しい。これは，一般に，一語文による発話と話し手の意図とが慣習的・固定的な結びつきを持たないことが原因であると考えられる。ここに一語文による発話の「意味の不確定性」を指摘することができる。しかし，一語文は現場依存(イマ・ココ)による使用であることから通常のコミュニケーションに支障をきたすことは稀であり，むしろこのことから発話のコンテクストが意味の重要な確定要因であることが裏付けられると言うことができる。

次に，聞き手への呼びかけという一語文を考えてみよう。ここでも，理論上「意味の不確定性」を認めることができる。聞き手に向かって名前，親族名称，役職名，人称代名詞などを用いて呼びかける場合をいま「呼名発話」と呼んでおく。一般に，呼名発話の機能は，会話以前にあってはこれから聞き手に話しかけるという話し手の意思表示，すなわち聞き手に対する注意惹起であり，会話中途にあっては聞き手の注意を会話の場面に向けさせ，それを維持・強化し，話題の流れの変化を意識させるところにあるという[注10)]。

(13)　美智子「まさか，本当に放っておくつもりじゃないでしょうね？　ふだん，ケンカしたって，
困ってるときに助けるのが友だちってもんでしょ！」
萩　原「まあな……」
美智子「萩原！」
萩　原「わかったよ，何とかしてみる」　(両沢和幸『お金がない』)

(14)　千佳「もうすぐね。わたしが死んだら〔ママは単身赴任の〕パパの所へ行けるわ」
ママ「千佳！」
千佳「そしたら，パパとママはとっても仲良しになれるわ。わたしがいなくなって，いちばん，
ほっとするのはパパとママだものね」　(灰谷健次郎『燕の駅』)

呼名発話における話し手の意図は観察者にとって必ずしも明らかではない。しかし，多くの場合，そ

の発話のコンテクストが話し手の意図を確定させることに参画し貢献する。上の例でみると，話し手による聞き手への呼名発話が(13)では非難・催促，(14)では制止として解釈することができるのはそれぞれのコンテクストによる。このように実際の会話では，通常，呼名発話の聞き手はその話し手の意図的意味を理解している。(13)の萩原は美智子の非難・催促する気持ちを理解した結果，友だちを助けようと考えを変えたのであり，(14)の千佳はママの制止する気持ちを理解しながらもそれを無視する形で自らの発話を続けたのである。

以上のことから，観察者にとっては聞き手が行った返答及び行為などの反応が話し手の一語文(呼名発話)の意味を理解し，解釈するヒントとなって意味の確定化に結びつくと言える。すなわち，聞き手の返答・行為といった反応がコンテクストの重要な一部を形成し，具体的な意味確定へと導くのである。換言すれば，不確定性を有する一語文の意味確定には，その発話現場に関する情報としてコンテクストが特に重要であり，中でも聞き手の返答は注目すべきものの１つであることになる[注11)]。

３．２　一般的な文

３．２．１　両義文

一語文ではない，２つ以上の語から構成される一般的な文にも「意味の不確定性」が認められる。ここでは，１つの文が複数の意味を表し，曖昧性を有する「両義文」を取り上げる。

以下に文法的曖昧性(constructional homonymity 構造上の同音異義)を有する両義文を示す。

(15)　Flying planes can be dangerous.[注12)]

→(a) 飛んでいる飛行機は危険になりうる。

→(b) 飛行機を飛ばすことは危険になりうる。

(16)　The lamb is too hot to eat.

→(a) 子羊はあつくて何も食べられない。

→(b) 料理された子羊の肉は熱くて誰も食べられない。

(17)　I saw a lady with a telescope.

→(a) 望遠鏡を持った婦人を見た。

→(b) 望遠鏡で婦人を見た。

日本語の例としては，次の(18)(19)ようなものがある。修飾成分(～線部)が被修飾成分(― 線部)に先行するという日本語の語順がもたらす係り受けにおける解釈の「ゆれ」という曖昧さによる両義文である。

(18)　兄は熱心に工作している弟を見ていた。

→(a) 兄は工作している弟を熱心に見ていた。

→(b) 熱心に工作している弟を兄は見ていた。

(19)　人々は美しい公園の花々を眺めて疲れを癒すのだった。

→(a) 人々は美しい公園に咲く花々を眺めて疲れを癒すのだった。

→(b) 人々は公園に咲く美しい花々を眺めて疲れを癒すのだった。

また，「ＡはＢのように(ような)……ない」構文も両義文となる[注13)]。

(20)　兄は弟のように賢くない。
(21)　チームは前半のような覇気の見られない試合を続けた。

ここでは「Bのように(ような)」は「Bと同じように(ような)」という否定の例示か，逆の「Bのようには(ようではない)」「Bと違って」の意味なのか，解釈の「ゆれ」がある。
なお，次の「ない」を含む文では文のイントネーションが曖昧性を除去する役割を果たしている。

(22)　あれ，富士山じゃない。
→(a) あれ，富士山じゃない！　下降調イントネーション・否定
→(b) あれ，富士山じゃない？　上昇調イントネーション・疑問・念押し

また，平仮名書き，片仮名書き，読点の欠如などから曖昧性を有する次のような両義文もある。

(23)　ここからはきものをぬいではいりなさい。
(24)　彼女は会社にはいらない。
(25)　この物語によりいっそう興味がわいてきた。
(26)　ツマデキタカネオクレ

これら文法的曖昧性を有する両義文において曖昧性を除去し，意味を一義的に確定することは，話し手・書き手が文意を明確にする目的を持って，読点を付けたり，語順や構文を変更したり，表現の加除訂正をしたりといった推敲を行うことで達成できるものである。そうではない場合にも，意味の確定要因はその文が使用されるコンテクストにあり，そこからの付加的情報をもとに話し手・書き手によって意図されている意味を確定することのできる場合が多い。

3．2．2　隣接発話

実際の会話中で話し手によってある文が発せられた場合，通常，その発話に対して聞き手から返答がなされる。その組合せが「最小対話」[注14)]であるが，そこに〈場所的隣接性〉とともに〈意味・機能的連関性〉を認める立場からここではそれを「隣接発話」と呼ぶことにしよう。隣接発話は先行発話と返答から構成される。返答は，〈場所的隣接性〉から捉えた狭義の「返答」と〈意味・機能的連関性〉から捉えた「応答」とが区別される[注15)]。

さて，夕食の開始時刻をたずねる次の隣接発話を見よう。(27)及び(28)はお客である石坂がコック長の加藤に対して夕食の時刻を同じように問いかけているのだが(—線部)，加藤の返答(〜線部)は同じではない。

(27)　石坂「夕食，何時からだい」
加藤「六時半，でいかがでございましょう」
石坂「結構」　(筒井康隆『フェミニズム殺人事件』)

(28)　石坂「夕食は何時からだね」
加藤「ははあ。空腹でいらっしゃいますか」コック長は眼を丸くした。
加藤「お客さま全員の希望で七時からということにいたしましたが，もう少し早めることは可能でございます」
石坂「いや。それでいいよ。シャワーを浴びて着替えをしていれば，どうせそれくらいにはなる」

加藤「左様で。ではお待ち申しあげております」　（同上）

石坂の発話の命題的意味はおよそ「夕食ハ何時カラ始マル予定デアルカ」といったものであり，それに対してコック長は(27)においては「六時半」という開始時刻で返答している。すなわち，石坂の発話は文字通りの意味で聞き手であるコック長に理解されている。石坂の発話は，夕食の開始時刻が不明であるために，それについての情報を持つコック長に向かってその情報を提供するようにと要求するという意味での質問文として機能している。つまり，石坂の行った発話の機能は〈問いかけ〉である。

ところが，(28)でのコック長は，石坂の文字通りには夕食の時刻を問いかける発話に対して直接的に情報提供する形の返答ではなく，空腹のために少しでも早く夕食を食べたいという石坂の意図(気持ち・真意)を汲み取った上での返答を行っている。すなわち，石坂の発話は文字通りの意味を超えた意味としてコック長に理解されている。言い換えれば，石坂の発話は予定時刻よりも早く夕食にしたいという催促文として機能しているのである。つまり，ここで石坂が行った発話の機能は〈催促〉であると解釈される。

以上の観察から，同じ命題的意味を持つ言語表現形式としての文ではあっても，文使用の際のコンテクストの相違によってその文形式が果たす発話の機能の異なることが確認される。いっぽう，発話の機能とは，話し手の意図に基づくものであると言うこともできる。しかしながら，そもそも話し手の意図的意味とは，時に話し手自身にも自らの発話意図が不明確であることがあるにせよ，通常，話し手にとって一義的に確定しているのに対し，聞き手にとっては必ずしも一義的に確定するとは限らない。この確定は観察者にとってはいっそう困難である。したがって，発話機能の観察に際しては，聞き手の行った理解・解釈，話し手が用いた言語形式，話し手・聞き手に関する情報，発話の流れ(文脈)などを含めたコンテクストを意味の確定要因として十分に考慮する必要があると考えられる。

4．おわりに

語・文形式とそれが運用された発話の果たす機能とには，通常，慣習的・固定的な結びつきがあるけれども，常にそれらが自然的・必然的・有縁的関係で結びついているかと言えば必ずしもそうではない。発話における「意味の不確定性」とは，文形式の持つ命題的意味がコンテクストの影響を受けてそれが果たす機能を変化させることがあるため，その文形式だけを単独でさし出されたのでは話し手の意図的意味が特定できないことを言い表している。そして，このことは言語が自然的記号であると同時に人為的記号であることとも平行的関係にある。しかし，文形式とそれが運用された発話の果たす機能とは全くの恣意的関係にあるものでもなく，程度の差はあるにしても，それらは何らかの関連性を有するものである。その関連性の具体的内実については別稿を期したい。

注

1）ここでは同音異義語の一般的な問題について述べている。なお，普通名詞ではなく，固有名詞の場合であればその意味が一義的に確定されると考えられるかもしれない。しかし，地名・人名・国名などを表す固有名詞は，たとえば「富士山」はその指示対象が1つに限定されているが，いっぽうで「銀座」は各地にあるし，「田中太郎」も全国に複数名存在する。つまり，固有名詞は1つの事物のみを表すとは言えず，その意味が一義的に確定されることはない。そして，「普通名詞が幾つかの事物をその共通性に基づいて一まとめにして呼ぶのに対し，固有名詞は同じ類の中の特定の事物を他と区別して示す」(阪倉篤義 1968)ところから，固有名詞においても言語形式と意味とが1対1の一義的関係で結びつく場合(例「富士山」「豊臣秀吉」)とそうではない場合(例「銀座」「田中太郎」)とがあることになる。鈴木英夫(1981)参照。

2）以下，アクセントは『新明解日本語アクセント辞典』『新明解国語辞典 第5版』に基づく。
3）言語運用の場面では統語環境，コンテクストが存在し，意味確定要因となっているのである。
4）語の意味を「内的状態」「対象との相関物」とみなす指示説に対して，「使用」「慣習」「実践」などとして捉える立場。使用説とも呼ばれる。
5）ウィトゲンシュタインは「語の意味とは，言語内におけるその慣用である」(Wittgenstein 訳書 1976:49))とも述べている。
6）深谷昌弘・田中茂範(1996)。
7）ここでは，たとえば渡辺実(1971:69)の文法論における「再展叙」の概念を想起することができる。すなわち，(9)との関連で言えば，連体形が統叙の機能を持ちながら再展叙の機能を託されるというあり方が，発話の意味の確定化が行われながら発話が続く限り，それが新たな不確定性を孕んでいるというあり方と〈同時的連続性〉という点で類似性が感じられるのである。
8）井上次夫(1997a)。
9）仁田義雄(1991)。
10）日向茂男(1983)。
11）井上次夫(1997b)。
12）(15)(16)(17)はそれぞれ『新言語学辞典』(研究社)，『ロングマン応用言語学用語辞典』(南雲堂)，『日本語要説』第11章(ひつじ書房)の挙例。
13）森田良行(1991)。
14）宮地裕(1979)。
15）井上次夫(1997c)。

参考・引用文献

井上次夫(1997a)「アイロニー表現について」『まほろば』40 奈良県高等学校国語部会研究紀要
————(1997b)「疑問詞疑問文に対する『うけこたえ』の構造」『日本語・日本文化研究』7 大阪外国語大学日本語講座
————(1997c)「依頼文・命令文に対する返答」『STUDIUM』25 大阪外国語大学大学院研究室
阪倉篤義(1968)「固有名詞」『國語學』72
鈴木英夫(1981)「名詞」『日本文法事典』有精堂
玉岡賀津雄他(2002)「『良妻ぶる』妻は『悪妻』か—接尾辞『ぶる』付加による価値評価の転換と収束」『日本語教育』114
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
日向茂男(1983)「呼びかけ」『講座日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房
深谷昌弘・田中茂範(1996)『コトバの〈意味づけ論〉』紀伊國屋書店
————————(1998)『〈意味づけ論〉の展開』紀伊國屋書店
宮地裕(1979)『新版・文論』明治書院
森田良行(1991)「語の意味と文の意味」『ことばシリーズ』34 文化庁
山田孝雄(1936)『日本文法學概論』宝文館出版
渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
Wittgenstein・藤本隆志訳(1976)『ウィトゲンシュタイン全集8 哲学探究』大修館書店

(inoue@oyama-ct.ac.jp)

「受理年月日 2002年9月30日」